2章　質問紙による調査

1.調査の目的と方法

今回の研究は、ふたつの調査を行った。ひとつは、中学生本人を対象にした質問紙調査、もうひとつは、中学生を含む家族に対する家族インタビュー調査である。まず、ここでは、質問紙調査の方法と結果を述べ、次の章で家族インタビュー調査の方法と結果を述べる。

●質問紙調査の目的

「学校に行く意欲」と「インフォーマルな場における意欲」を測定し、両者の関連性、さらに、本人の成績・性格などの属性と家族の属性との関連性を検証する。

●具体的な質問項目(巻末の資料を参照)

1.「学校に行く意欲」として、学校に行きたくないと感じた経験の有無とその理由、学校に行く理由、学校が楽しくなるための要件などを尋ねた。
2.「インフォーマルな場における意欲」として、友人関係、休み時間の過ごし方と印象、自分が生き生きとしている体験について、クラブ活動の参加度などを尋ねた。
3.これらの意欲との関連する項目として、自分の性格と成績を尋ねた。さらに、家族の属性として、家族環境尺度を用いた。

＊家族環境尺度(Family Environmental Scale)：個々の家族に臨床的に関わる際にその家族が持つ心理・社会的特性を客観的に評価するための試みである。アメリカのMoosら(1974)によって開発され、野口ら(1991)によって日本版が開発された。家族環境尺度は10の下位尺度からなり、それぞれの下位尺度に9問の項目が含まれ、計90問からなる。下位尺度は、凝集性、表出性、葛藤性、独立性、達成指向性、知的文化的指向性、活動娯楽指向性、道徳宗教性、組織性、統制性からなる。本研究では、これらのうち凝集性、表出性、葛藤性、独立性および達成指向性を用いた。

(具体的な調査項目は巻末の調査票見本を参照のこと)

●対象　東京都および香川県の公立中学校3校に通う中学生1522名（46クラス）。性別は表２のとおり。

●配布方法　学校通しにより質問紙を配布し、その場で回収した。

表2 対象者の属性（実数）

	男子	女子	全体
1年生	285	278	563　(37.0%)
2年生	272	227	499　(32.8%)
3年生	256	204	460　(30.2%)
合計	813(53.4%)	709(46.6%)	1522 (100.0%)

2.結果

(1) 全体の傾向／学校に行く意欲

①学校は楽しいか

第1に、学校に行く意欲についてみてみよう。図1のとおり、学校に行くことが楽しいと答えている人は「とても楽しい」と「まあまあ楽しい」を含めると7割以上が楽しいと答えている。しかし、図2-1をみると、「学校に行きたくない」と思ったことがまったくない生徒は2割に過ぎず、8割近くの者は多少とも「学校に行きたくない」と思ったことがあると答えている。次に、そのような生徒に対して実際にそのような理由から学校を休んだことがあるか(病気やけがなどやむを得ない場合をのぞく)尋ねた。これも図2-2にあるとおり、過半数の者は行きたくないと思いながらも実際には全く休んでいない。しかし全体の17.3%の者は実際に休むことがあるとしている。彼らは表面的に「学校は楽しいか」と聞かれれば大多数の者が楽しいと答える。だからといって学校に行くことを全面的に肯定しているわけではなく、8割近くは多少とも学校に行きたくないと思ったことがあるのが実状である。そう思いながらも多くの者たちは休まず学校に行っているが、やむを得ない理由がないのに休むことがあると答えた17.3%の者たちの動向が気になるところである。

図1　学校に行くことが楽しいか (%)

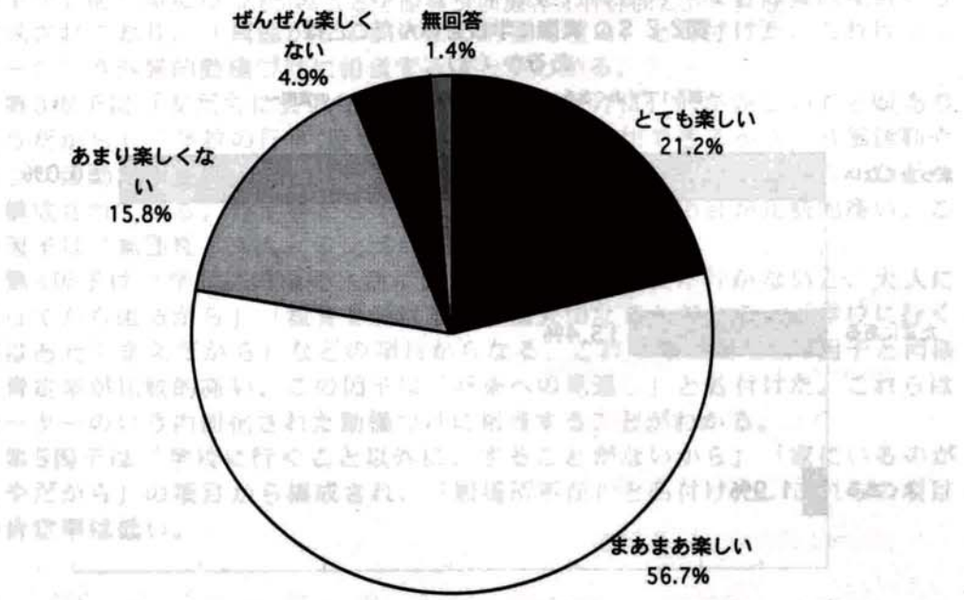


図2-1 「学校に行きたくない」と
思ったことはあるか（%）

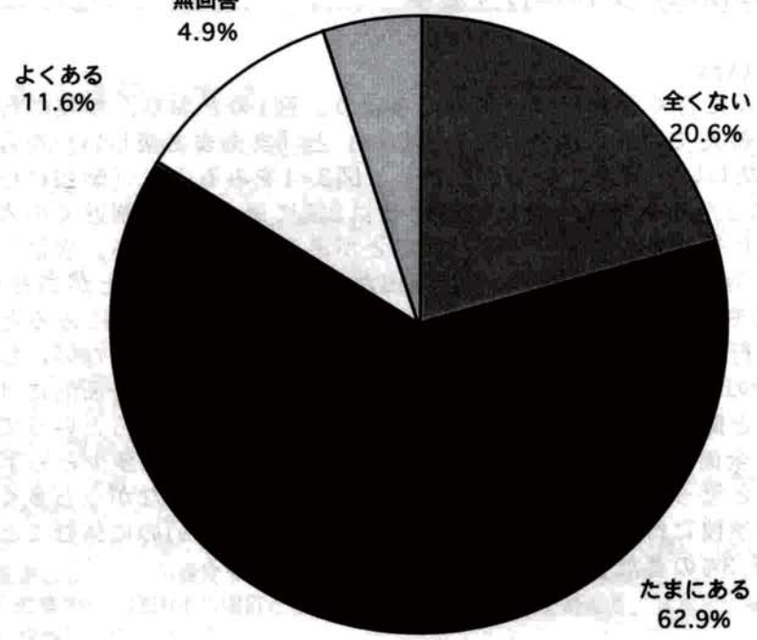
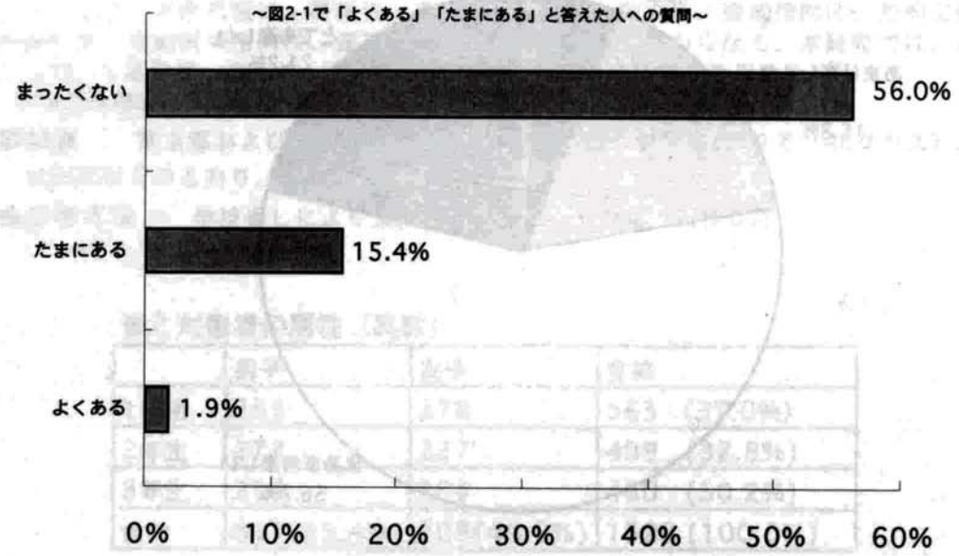


図2-2 ＳＱ 実際に学校を休んだことは
あるか（%）
～図2-1で「よくある」「たまにある」と答えた人への質問～



②なぜ学校に来ているのか

次に、学校に行きたい、ないしは行きたくないという意欲が、どのような要素から構成されているのか詳しくみてみよう。図3では「なぜ学校に来ているのか」という質問を提示し、考えられる要素22項目についてそれぞれ4件法で回答してもらった。

一番肯定率が高かったのが「友だちに会えるから」で82.6%である。以下、「学校に行くのはあたりまえだから」「学校に行かないと大人になってから困るから」「学校に行けば、何か楽しいことがありそうだから」などが続くが、いずれも漠然とした理由である。「勉強することが好きだから」あるいは「学校の授業が楽しいから」などの要因は低く、これらが直接の要因にはなりえていないことがわかる。これらの要因をより詳しく分析するために、この22項目に対して因子分析(Varimax回転)を行った。その結果が表3のとおりである。

第1因子は学校に行く理由として「勉強することが好きだから」「学校の授業が楽しいから」「先生に会えるから」「知らないことを理解することが楽しいから」「得意な科目があるから」などの回答項目から構成されている。それぞれの肯定率は低いものの、最もまとまった因子として構成される(寄与率=21.4%)。この因子は「学習に対する興味」と名付けた。これはまさにブルナーのいう内発的動機づけに相当することがわかる。

第2因子は「学校に行かないと、親が心配するから」「学校に行かないと、親から怒られるから」「学校に行かないと、悪い成績をつけられるから」「学校に行かないと、友だちから仲間はずれにされるから」「学校に行かないと、先生が心配するだろうから」「みんなが学校に行くから」などの質問項目から構成されており、「周囲からの罰による消極的理由」と名付けた。これはブルナーのいう外発的動機づけに相当することがわかる。

第3因子は「友だちに会えるから」「学校に行けば、何か楽しいことがありそうだから」「学校の行事(遠足、運動会など)に参加できるから」「部活動やクラブ活動が楽しいから」「好きな人、あこがれている人がいるから」などから構成されている。肯定率としてはこの因子を構成する項目が比較的高い。この因子は「集団性・友人との交流」と名付けた。

第4因子は「学歴は将来の生活に大切だから」「学校に行かないと、大人になってから困るから」「教育を受けることは大切なことだから」「学校に行くのはあたりまえだから」などの項目からなる。これらの項目も第3因子と同様に肯定率が比較的高い。この因子は「将来への見通し」と名付けた。これらはハーターのいう内面化された動機づけに相当することがわかる。

第5因子は「学校に行くこと以外に、することがないから」「家にいるのがいやだから」の項目から構成され、「居場所不在」と名付けた。これらの項目の肯定率は低い。

図3　学校に行く理由（とてもそう思う＋まあまあそう思う　%）

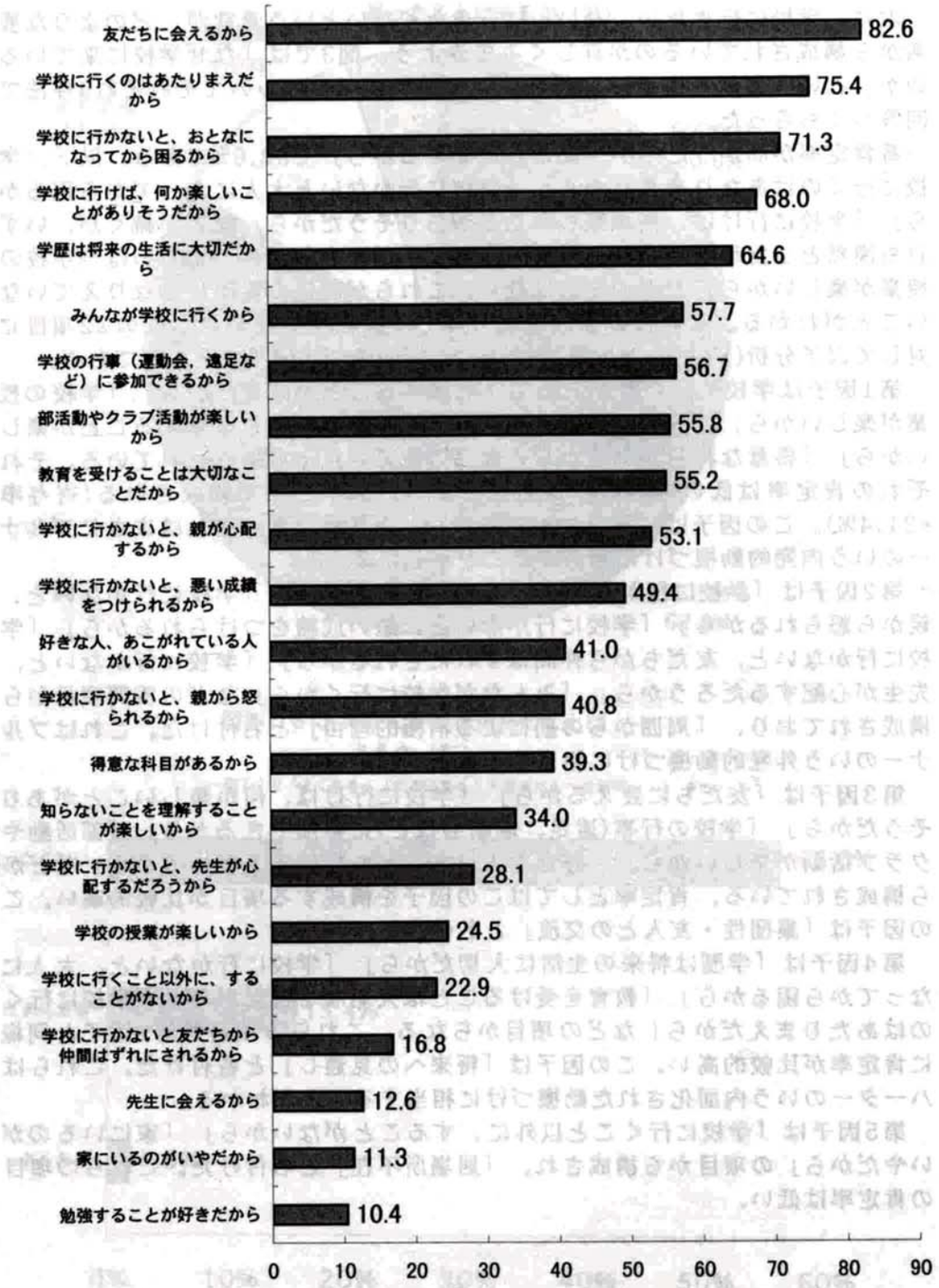


表3　学校に行く理由（因子分析）

	因子ｽｺｱ	肯定率*
第1因子（寄与率=21.4%）=学習に対する興味		
（内発的動機づけ）		
勉強することが好きだから	0.779	10.4
学校の授業が楽しいから	0.773	24.5
先生に会えるから	0.732	12.6
知らないことを理解することが楽しいから	0.640	34.0
得意な科目があるから	0.512	39.3
第2因子（寄与率=14.4%）=周囲からの罰による消極的理由		
（外発的動機づけ）		
学校に行かないと、親が心配するから	0.733	53.1
学校に行かないと、親から怒られるから	0.726	40.8
学校に行かないと、悪い成績をつけられるから	0.624	49.4
学校に行かないと、友だちから仲間はずれにされるから	0.537	16.8
学校に行かないと、先生が心配するだろうから	0.528	28.1
みんなが学校に行くから	0.462	57.7
第3因子（寄与率=7.1%）=集団性・友人との交流		
友だちに会えるから	0.749	82.6
学校に行けば、何か楽しいことがありそうだから	0.689	68.0
学校の行事（遠足、運動会など）に参加できるから	0.689	56.7
部活動やクラブ活動が楽しいから	0.566	55.8
好きな人、あこがれている人がいるから	0.506	41.0
第4因子（寄与率=6.4%）=将来への見通し(内面化された動機づけ)		
学歴は将来の生活に大切だから	0.789	64.6
学校に行かないと、大人になってから困るから	0.755	71.3
教育を受けることは大切なことだから	0.672	55.2
学校に行くのはあたりまえだから	0.514	75.4
第5因子（寄与率=5.3%）=居場所不在		
学校に行くこと以外に、することがないから	0.789	22.9
家にいるのがいやだから	0.786	11.3

*注：肯定率=「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」の割合（%）

③学校に行きたくない理由

図3・表3では、学校に行く理由を尋ねたわけであるが、今度はその裏側、つまり「学校に行きたくない理由」について、そう思ったことがある約8割の者に尋ねた。あらかじめこちらから考えられる理由21項目を提示し、それらがあてはまるかを4件法で回答してもらった。その結果が図4である。一番肯定率が高かったのが「朝、起きるのがつらいから」で、45.8%である。以下「授業がおもしろくないから」「学校より家の方が居心地がよいから」「いやな人がいるから」「校則が厳しいから」などが続く。これらを整理するためにこの21項目に対して因子分析(Varimax回転)を行った。その結果が表4のとおりである。

第1因子は「校則が厳しいから」「先生がいやだから」「授業がおもしろくないから」「学校で勉強することは意味がないと思うから」「みんなと同じことをしなければならないから」「勉強がむずかしすぎるから」などの質問項目から構成されており、因子名を「校則・授業」と名付けた。

第2因子は「友だちとうまくいかないから」「仲のよい友だちがいないから」「クラスの雰囲気になじめないから」「友人からいじめられたり、無視されるから」「たくさんの人に会うのが疲れるから」「友だちやまわりの人と比較されるのがいやだから」「いやな人がいるから」などの項目から構成されている。この因子は「友人関係」と名付けた。

第3因子は「何となく体の調子がよくないから」「朝、起きるのがつらいから」などからなる。これは「身体の不調」と名付けた。

第4因子は「クラブや部活動がいやだから」「先輩・後輩の関係がいやだから」の項目からなり、因子名を「クラブ活動」と名付けた。

第5因子は「授業が簡単すぎるから」の項目からなり、肯定率はごく低い。

以上をまとめると、中学生たちを学校に引きつける要因としてブルナー、ハーターらの動機づけ理論がよくあてはまることが実証された。すなわち、内発的動機づけとしての「学習に対する興味」、外発的動機づけとしての「周囲からの罰による消極的理由」、内面化された動機づけとしての「将来への見通し」などが主な要因として分別される。それらに加えて「集団性・友人との交流」も重要な要因となっていることが見逃すことができない。また、反対に学校から遠ざける要因としては校則・授業と、友人関係が重要であることがわかった。

図4 学校に行きたくない理由 (そう思う＋まあまあそう思う %)

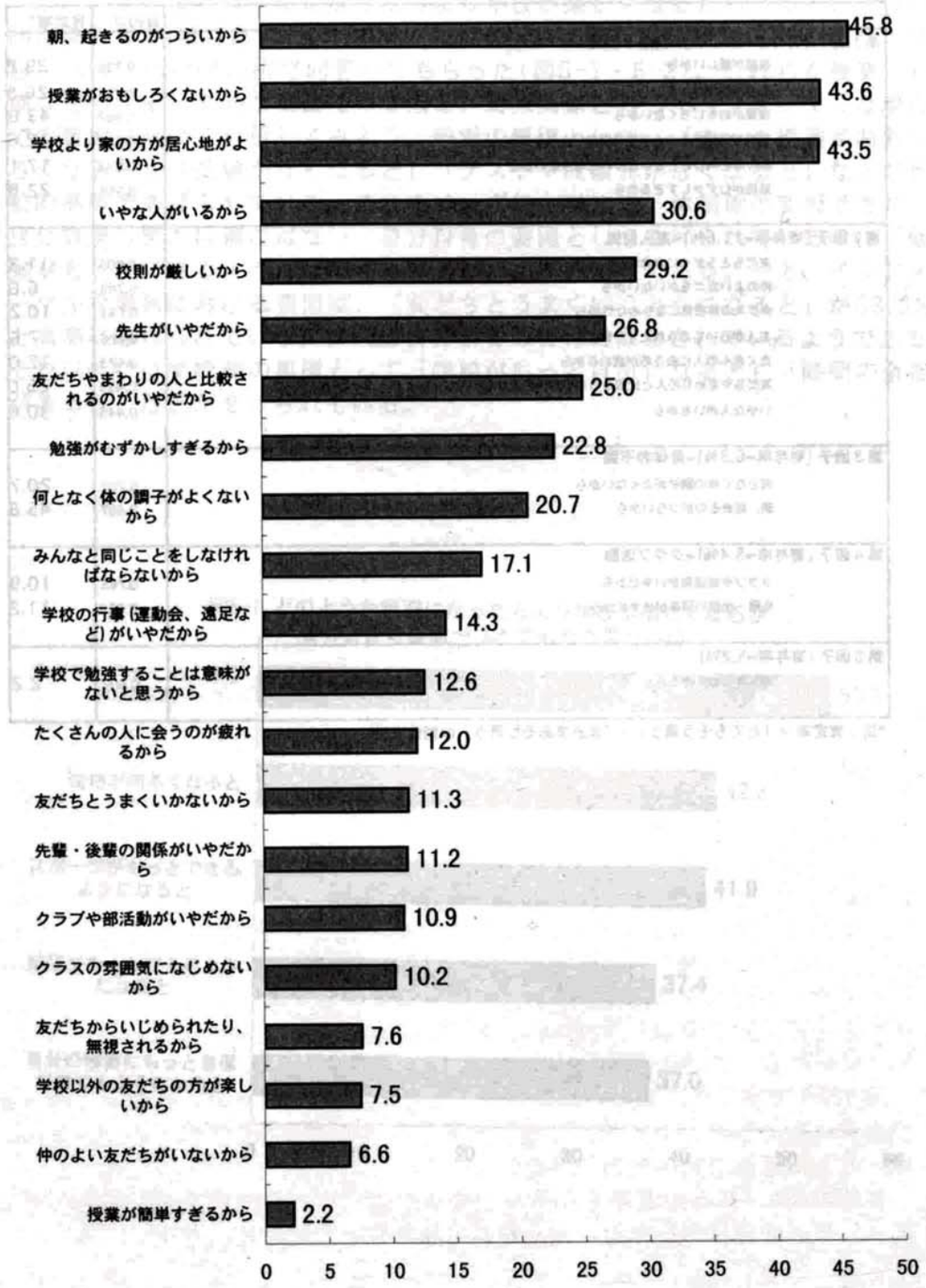


表4　学校に行きたくない理由（因子分析）

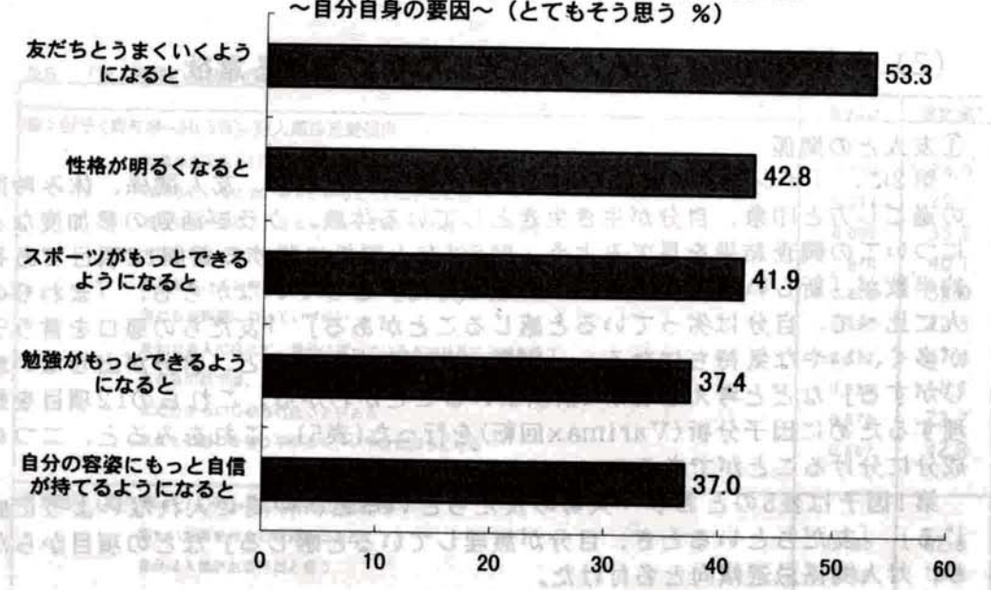
	因子ｽｺｱ	肯定率*
第1因子（寄与率=25.7%）=校則・授業		
校則が厳しいから	0.730	29.2
先生がいやだから	0.711	26.8
授業がおもしろくないから	0.692	43.6
学校で勉強することは意味がないと思うから	0.658	12.6
みんなと同じことをしなければならないから	0.545	17.1
勉強がむずかしすぎるから	0.539	22.8
第2因子（寄与率=11.6%）=友人関係		
友だちとうまくいかないから	0.809	11.3
仲のよい友だちがいないから	0.746	6.6
クラスの雰囲気になじめないから	0.741	10.2
友人からいじめられたり、無視されるから	0.706	7.6
たくさんの人に会うのが疲れるから	0.473	12.0
友だちやまわりの人と比較されるのがいやだから	0.459	25.0
いやな人がいるから	0.443	30.6
第3因子（寄与率=6.3%）=身体の不調		
何となく体の調子がよくないから	0.702	20.7
朝、起きるのがつらいから	0.687	45.8
第4因子（寄与率=5.4%）=クラブ活動		
クラブや部活動がいやだから	0.765	10.9
先輩・後輩の関係がいやだから	0.682	11.2
第5因子（寄与率=5.2%）		
授業が簡単すぎるから	0.803	2.2

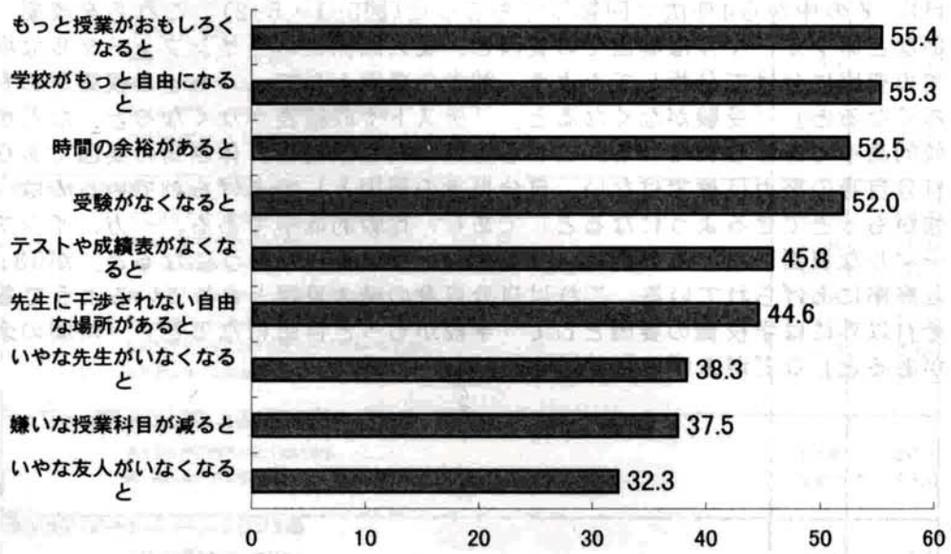
*注：肯定率＝「とてもそう思う」＋「まあまあそう思う」の割合（%）

④学校が楽しくなる条件

次に、どのような状況になったらより学校が楽しくなるだろうかという仮定的な条件を14項目あげ(自分自身に関する項目:5項目、学校に関する項目:9項目)、その中から4件法で回答してもらった(図5-1・5-2)。これらを授業・校則などのフォーマルな場面での要因と、友人関係というインフォーマルな場面での要因に分けて分析してみよう。前者の要因として、「もっと授業がおもしろくなると」「受験がなくなると」「テストや成績表がなくなると」などが比較的高率であげられている。これらはいずれも学校側、体制側の要因であり、自分自身の努力目標ではない。自分自身の要因としてあげられているのは「勉強がもっとできるようになると」であり、比較的低率である。一方、インフォーマルな場面における要因は、「友だちとうまくいくようになると」が53.3%と高率にあげられている。これは自分自身の努力目標とされているようである。それ以外には学校側の要因として「学校がもっと自由になると」「時間の余裕があると」などがあげられている。

図5-1 どのような状況になったらより学校が楽しくなるか
～自分自身の要因～（とてもそう思う %）





（2）全体の傾向／インフォーマルな場における意欲

①友人との関係

第2に、「インフォーマルな場における意欲」として、友人関係、休み時間の過ごし方と印象、自分が生き生きとしている体験、クラブ活動の参加度などについての調査結果を見てみよう。図6は友人関係に関する質問12項目である。約半数が「新しい友達を作るのが得意な方だ」としていながらも、「まわりの人に比べて、自分は劣っていると感じることがある」「友だちの悪口を言う子が多く、いやな気持ちになる」「大勢の友人の中にいると、自分が出せない感じがする」などと考える者が4割以上いることがわかる。これらの12項目を整理するために因子分析(Varimax回転)を行った(表5)。これをみると、二つの成分に分けることができる。

第1因子は表5のとおり「大勢の友だちといると、仲間に入れないように感じる」「友だちといるとき、自分が無理していると感じる」などの項目からなり、対人関係忌避傾向と名付けた。

第2因子は「新しい友達を作るのが得意な方だ」「自分は人気がある方だと思う」などの項目からなり、対人関係の積極性と名付けた。

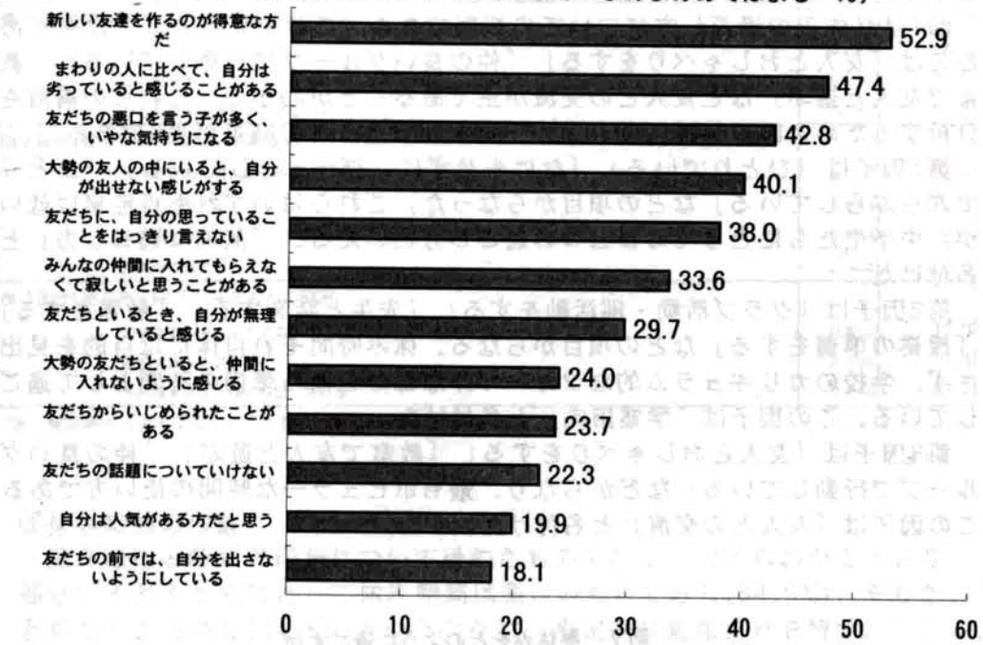


表5　「友人関係の質問」の因子分析

	因子ｽｺｱ	肯定率*
第1因子（寄与率=36.5%）=対人関係忌避傾向		
大勢の友だちといると、仲間に入れないように感じる	0.739	24.0
友だちといるとき、自分が無理していると感じる	0.697	29.7
みんなの仲間に入れてもらえなくて寂しいと思うことがある	0.690	33.6
大勢の友人の中にいると、自分が出せない感じがする	0.670	40.1
友だちに、自分の思っていることをはっきり言えない	0.670	38.0
友だちの話題についていけない	0.629	22.3
まわりの人に比べて、自分は劣っていると感じることがある	0.592	47.4
友だちの前では、自分を出さないようにしている	0.586	18.1
友だちからいじめられたことがある	0.578	23.7
友だちの悪口を言う子が多く、いやな気持ちになる	0.567	42.8
第2因子（寄与率=11.0%）=対人関係の積極性		
新しい友達を作るのが得意な方だ	0.780	52.9
自分は人気がある方だと思う	0.769	19.9

*注：肯定率＝「あてはまる」＋「まあまああてはまる」の割合（%）

②昼休みの過ごし方

図7は昼休みの過ごし方についての質問である。これを見ると、上位を占めるのは「友人とおしゃべりをする」「仲の良いグループで行動している」「教室で友人と遊ぶ」など友人との交流が主であることがわかる。これらの構造を分析するために因子分析(Varimax回転)を行った。その結果が表6である。

第1因子は「ひとりでいる」「なにもせずに、ぼーっとしている」「ひとりでぶらぶらしている」などの項目からなった。これらはいずれも肯定率は低いが、中学生たちにとってのひとつの過ごし方といえる。「無為な過ごし方」と名付けた。

第2因子は「クラブ活動・部活動をする」「先生と話をする」「勉強をする」「授業の準備をする」などの項目からなる。休み時間それ自体には目的を見出さず、学校のカリキュラム的なフォーマルな部分を補う準備の時間として過ごしている。この因子は「学業指向」と名付けた。

第3因子は「友人とおしゃべりをする」「教室で友人と遊ぶ」「仲の良いグループで行動している」などからなり、最もポピュラーな時間の使い方である。この因子は「友人との交流」と名付けた。

図7　昼休みをどのように過ごすか
（よくする＋ときどきする　%）

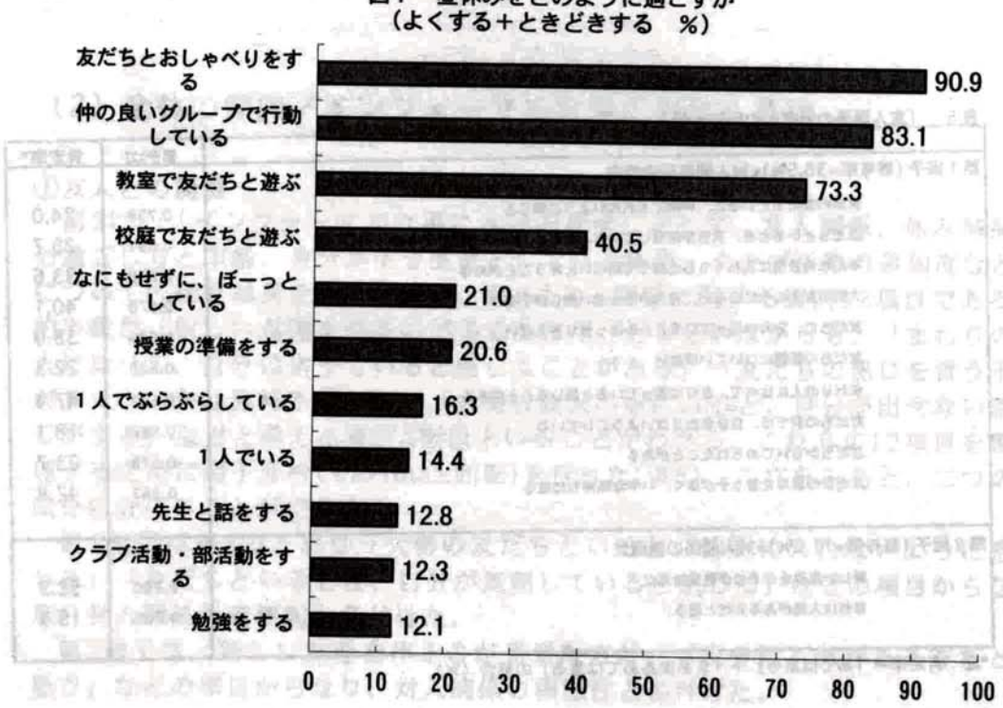


表6「昼休みの過ごし方」の因子分析

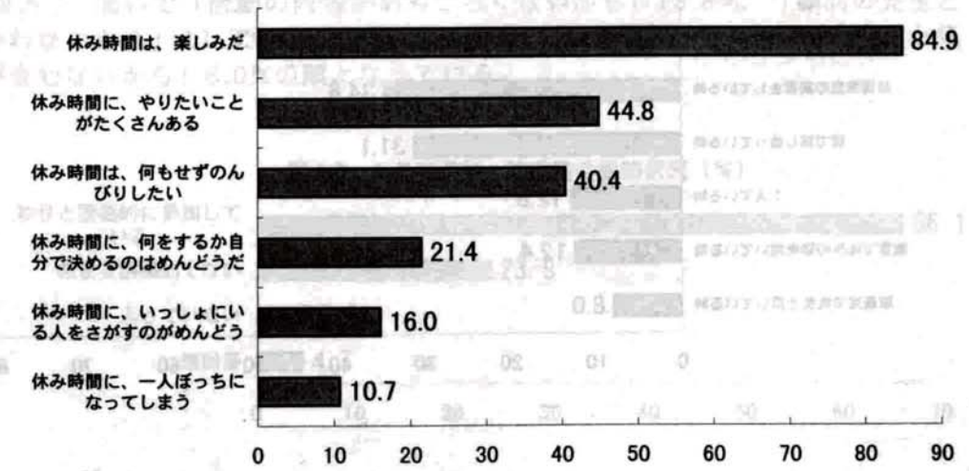
	因子ｽｺｱ	肯定率*
第1因子(寄与率=27.0%)=無為な過ごし方		
ひとりでいる	0.826	14.4
なにもせずに、ぼーっとしている	0.795	21.0
ひとりでぶらぶらしている	0.783	16.3
第2因子(寄与率=17.6%)=学業指向		
クラブ活動・部活動をする	0.707	12.3
先生と話をする	0.641	12.8
勉強をする	0.639	12.1
授業の準備をする	0.602	20.6
第3因子(寄与率=12.1%)=友人との交流		
友人とおしゃべりをする	0.811	90.9
教室で友人と遊ぶ	0.745	73.3
仲の良いグループで行動している	0.514	83.1

*注：肯定率＝「よくする」＋「ときどきする」の割合（%）

③休み時間の印象

図8は休み時間の印象について尋ねたものである。図からわかるとおり、大部分の子どもたちにとって休み時間は楽しいものであり(84.9%)、やりたいことがたくさんある(44.8%)というように、肯定的な意味づけを持つ。しかし、何もせずのんびりしたいと、疲れた心身を休める休息の場として位置づけている子どもも4割ほどいる。また反対に、「何をするか自分で決めるのはめんどうだ」「いっしょにいる人をさがすのがめんどうだ」「ひとりぼっちになってしまう」というように、否定的な意味づけを持つ場合も少数ながらあることも見逃せない。

図8　休み時間の印象（とてもそう思う＋わりとそう思う　%）



④自分が生き生きしている時

図9は、どのようなときに「自分が生き生きしている」と感じるかについて尋ねたものである。この構造をさらに分析するために因子分析(Varimax回転)を行った。その結果が表7である。「昼休み」が最も多く72.3%である。ついで「何人かの友だちと話している時」「部活動・クラブ活動をしている時」「友だちと1対1で話している時」などからなる。これらの構造を解析すると、フォーマルな場とインフォーマルな場にきれいに分かれた。

第1因子は「何人かの友だちと話している時」「昼休み」「友だちと1対1で話している時」「昼食を食べている時」から構成され、これは学校の学業として規定されていないインフォーマルな場における活性である。

第2因子は「体育の実技をしている時」「技術家庭の実習をしている時」「部活動・クラブ活動をしている時」「班で話し合っている時」から構成される。これらはいずれも学業ないしはクラブ活動という公的な活動に組み込まれたフォーマルな場における生きがいということができる。

図9 自分が生き生きしているとき（とても+まあまあそう思う %）

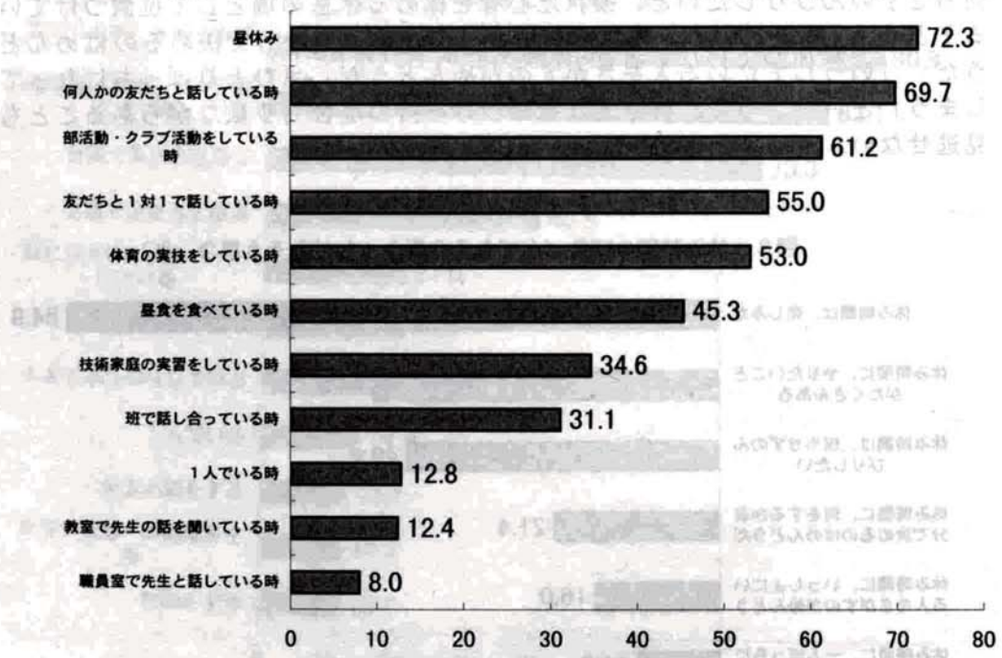


表7 「自分が生き生きしているとき」の因子分析

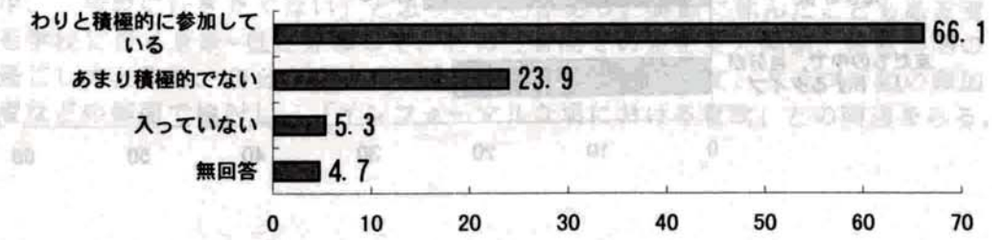
	因子ｽｺｱ	肯定率*
第1因子(寄与率=31.0%)=インフォーマルな場における生きがい		
何人かの友だちと話している時	0.821	69.7
昼休み	0.725	72.3
友だちと1対1で話している時	0.720	55.0
昼食を食べている時	0.581	45.3
第2因子(寄与率=15.3%)=フォーマルな場における生きがい		
体育の実技をしている時	0.761	53.0
技術家庭の実習をしている時	0.670	34.6
部活動・クラブ活動をしている時	0.596	61.2
班で話し合っている時	0.535	31.1

*注：肯定率=「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」の割合（%）

⑤クラブ活動・部活動の参加状況

次に、対象者のクラブ活動・部活動への参加状況についてみる。図10にあるとおり、わりと積極的に参加している者が3分の2、あまり積極的でない者が4分の1、参加していない者が5%ほどである。積極的な場合、そうでない場合のそれぞれの理由について尋ねた。積極的に活動している場合、その理由は「仲間と一緒にいるのがおもしろいから」が最も多く54.5%「活動の内容がおもしろいから」が45.3%「選手・部長など責任ある立場だから」が15.3%であり、「顧問の先生にひかれて」というのは少なく7.8%であった。逆に、あまり積極的でない理由をあげてもらうと「めんどくさいから」が最も多くて19.6%、次いで「活動の内容がおもしろくないから」15.8%、「顧問の先生と合わないから」11.8%「他にやることがあって忙しいから」9.8%「仲間と気が合わないから」6.0%の順となっている。

図10 クラブ活動・部活動の参加状況（%）



（3）全体の傾向／意欲と関連する項目

①自己評価

第3に、これらの意欲との関連する項目として、自分の性格と成績などについての調査結果を見てみよう。性格の自己評価は図11にあげたとおりである。「自分から進んで友だちの中に入っていくタイプ」「いつもだれかといっしょでないと寂しいタイプ」というのが5割強あり、以下図11を参照いただきたい。

成績の自己評価は図12のとおりである。「どちらかというと悪い方」「どちらかというとよい方」などと曖昧に答える者が多いが、中でも「どちらかというと悪い方」と答える者が37.6%と最も多い。「よい方」ときっぱり答えられる者は7.0%に過ぎないのに対して、「悪い方」と答える者は22.4％もいる。

図１１　性格についての自己評価
（とてもそう＋わりとそう　%）

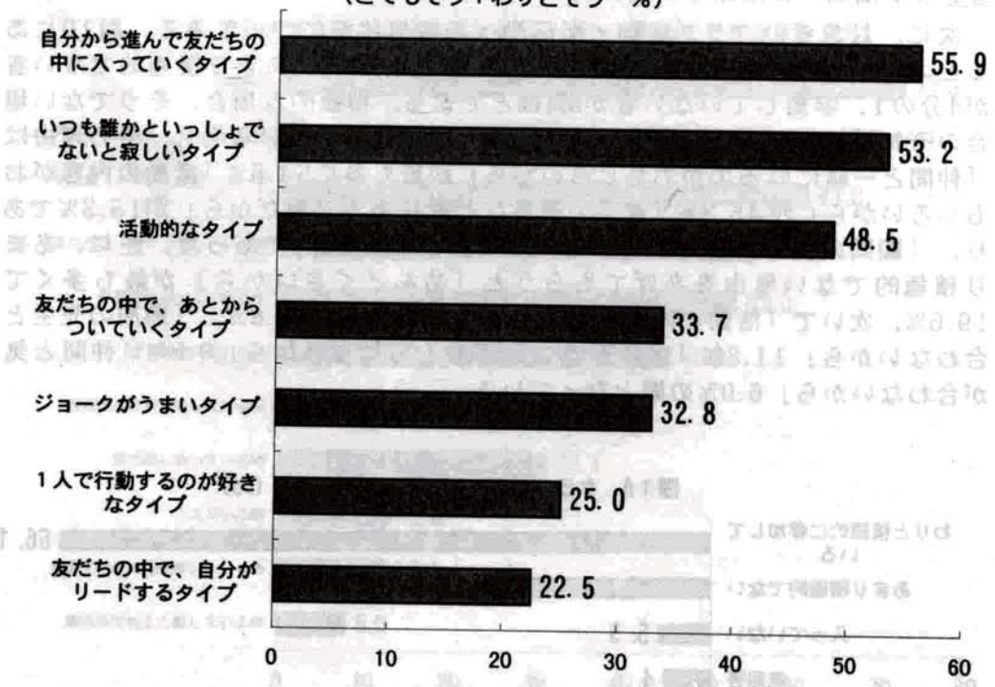
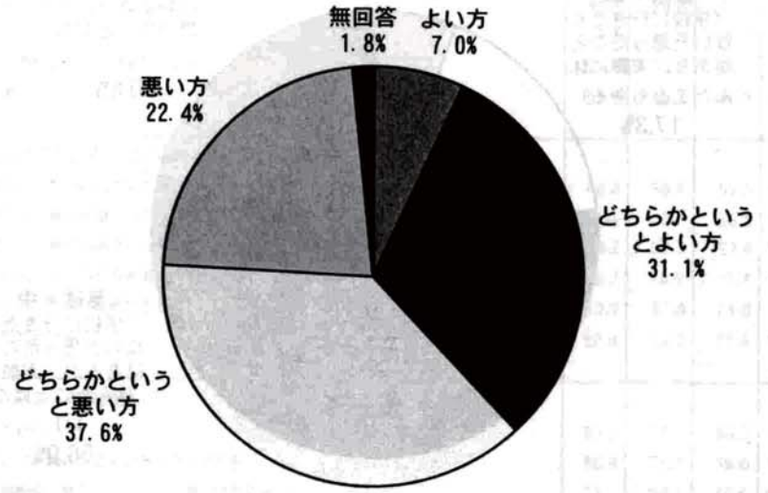


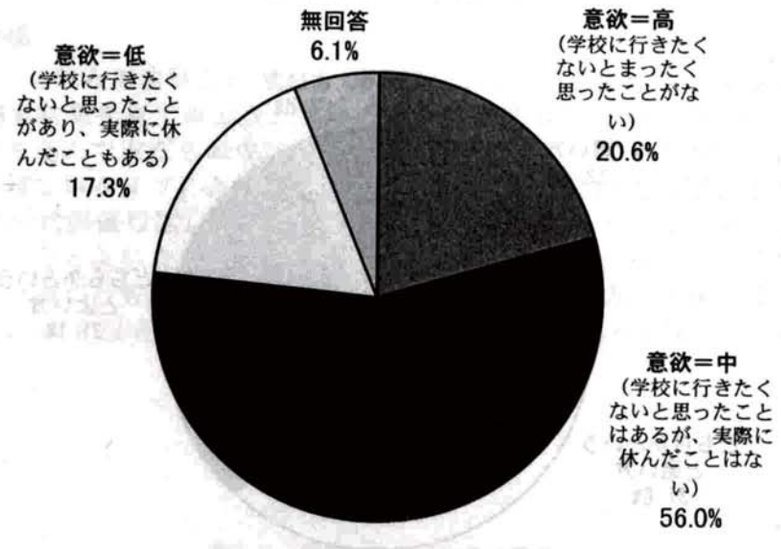
図１２　成績についての自己評価



（4）「学校に行く意欲」の高い者とそうでない者の比較
（学校に行く意欲の高、低による比較）

はじめに定義したふたつの意欲、つまり「学校に行く意欲」と「インフォーマルな場における意欲」の関連性について検討しよう。質問項目を組み合わせた結果、学校に行く意欲の程度は図13のとおりである。「学校に行きたくない」とまったく思ったことがない者を学校に行く意欲=高、「学校に行きたくない」と思ったことはあるが、実際に休んだことはない者を学校に行く意欲=中、「学校に行きたくない」と思ったことがあり、実際に休んだこともある者を学校に行く意欲=低と分類して、この三者間での差を友人関係、休み時間の過ごし方と印象、自分が生き生きとしている体験について、クラブ活動の参加度などの側面で検討し、「インフォーマルな場における意欲」との関連をみる。

図１３　学校に行く意欲



①「学校に行く理由」との関連

表8では、学校に行く理由について見てみよう。学校に行く意欲が低い者ほど内発的動機づけは低く、外発的動機づけが高い。また、集団性・友人との交流も低くなっている。つまり、学校に行く意欲が高い者ほど、学習そのものに対する興味である内発的動機づけが高く、また集団性や友人関係に対する興味が高く、それも学校へ向かわせる動機の重要な要因のひとつになっている。反対に、学校に行く意欲が低い者ほど学習や集団性・友人関係に対する関心が低く、親や周囲の目を気にして、他者からの動機づけに頼らなければならないということである。

②「どのような状況になったら学校は楽しいか」との関連

表9は、どのような状況になったらより学校が楽しくなるかという質問を比較したものである。学校に行く意欲が高い者ほど、自分の属性によって学校がより楽しくなるとしているのに対し、学校に行く意欲が低い者ほど、自分の属性による変化は期待せず、むしろ学校や体制側の変化によって学校に行く動機づけが高まることを期待している。

表8　学校に行く理由×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
第１因子（学習に対する興味=内発的動機づけ）				
勉強することが好きだから	18.5	9.1	7.6	**
学校の授業が楽しいから	45.2	20.8	17.7	**
先生に会えるから	23.2	11.0	10.1	**
知らないことを理解することが楽しいから	51.9	34.5	23.3	**
得意な科目があるから	51.9	40.3	32.9	**
第２因子（周囲からの罰による消極的理由=外発的動機づけ）				
学校に行かないと、親が心配するから	46.8	59.8	59.0	**
学校に行かないと、親から怒られるから	27.8	46.7	55.8	**
学校に行かないと、悪い成績をつけられるから	38.2	56.3	59.8	**
学校に行かないと、友だちから仲間はずれにされるから	12.2	18.9	21.4	**
学校に行かないと、先生が心配するだろうから	30.0	31.8	24.6	
みんなが学校に行くから	52.4	66.0	59.6	**
第３因子（集団性・友人との交流）				
友だちに会えるから	95.8	87.1	80.3	**
学校に行けば、何か楽しいことがありそうだから	86.9	70.3	59.0	**
学校の行事（運動会、修学旅行など）に参加できるから	74.7	58.1	50.6	**
部活動やクラブ活動が楽しいから	76.0	57.4	47.0	**
好きな人、あこがれている人がいるから	42.5	44.2	46.6	
第４因子（将来への見通し=内面化された動機づけ）				
学歴は将来の生活に大切だから	73.8	69.8	61.0	**
学校に行かないと、大人になってから困るから	75.1	79.0	67.9	**
教育を受けることは大切なことだから	70.2	59.6	40.9	**
学校に行くのはあたりまえだから	76.3	84.9	73.8	**
第５因子（居場所不在）				
学校に行くこと以外に、することがないから	17.3	26.1	26.8	**
家にいるのがいやだから	14.4	10.5	12.4	

注：数値は「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」の割合（%）
有意差は次のとおり(**: p<.01, *: p<.05)　以下，表１５まで同様

表9　どのような状況になったらより学校が楽しくなるか×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
（自分自身の要因）				
友だちとうまくいくようになると	55.9	54.1	52.1	**
性格が明るくなると	46.0	43.4	41.3	**
スポーツがもっとできるようになると	47.1	41.3	38.8	**
勉強がもっとできるようになると	42.6	37.3	33.1	*
自分の容姿にもっと自身が持てるようになると	35.5	38.7	34.9	
（学校の要因）				
もっと授業がおもしろくなると	51.1	57.0	55.5	*
学校がもっと自由になると	40.4	59.6	61.9	**
時間の余裕があると	43.9	55.3	58.9	**
受験がなくなると	39.9	56.9	55.9	**
テストや成績表がなくなると	36.4	48.9	49.1	**
先生に干渉されない自由な場所があると	27.9	48.1	54.8	**
いやな先生がいなくなると	23.6	41.6	45.9	**
嫌いな授業科目が減ると	30.7	39.3	40.6	**
いやな友人がいなくなると	17.3	34.7	43.8	**

注：数値は「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の割合（%）

③「友人関係」との関連

表10は、友人関係についてである。学校に行く意欲が低い者ほど友人との対人関係も困難に感じる度合いが高く、友人関係に対して消極的である。

表10　友人関係×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
第1因子（対人関係忌避傾向）				
大勢の友だちといると、仲間に入れないように感じる	10.3	27.1	29.3	**
友だちといるとき、自分が無理していると感じる	13.2	32.5	40.2	**
みんなの仲間に入れてもらえなくて寂しいと思うことがある	22.5	37.2	36.7	**
大勢の友人の中にいると、自分が出せない感じがする	31.8	42.1	44.8	**
友だちに、自分の思っていることをはっきり言えない	28.2	40.6	40.6	**
友だちの話題についていけない	16.5	22.6	26.1	*
まわりの人に比べて、自分は劣っていると感じることがある	36.7	50.3	53.4	**
友だちの前では、自分を出さないようにしている	7.7	19.7	24.3	**
友だちからいじめられたことがある	12.6	25.2	32.4	**
友だちの悪口を言う子が多く、いやな気持ちになる	39.2	44.3	43.9	
第2因子（対人関係の積極性）				
新しい友達を作るのが得意な方だ	64.8	50.8	49.8	**
自分は人気がある方だと思う	25.1	18.4	17.9	*

注：数値は「あてはまる」+「まあまああてはまる」の割合（%）

④「休み時間」との関連

表11は、休み時間の過ごし方である。学校に行く意欲が低い者ほど休み時間の友人との交流が少なく、ひとりでいる、なにもせずにぼーっとしているなどの無為な過ごし方をしている割合が高くなっている。

表11　休み時間の過ごし方×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
第1因子(無為な過ごし方)				
ひとりでいる	8.7	15.3	19.0	**
なにもせずに、ぼっとしている	13.5	22.3	26.8	**
ひとりでぶらぶらしている	10.6	17.2	20.0	**
第2因子(学業指向)				
クラブ活動・部活動をする	16.6	11.2	11.0	*
先生と話をする	15.8	12.1	10.4	
勉強をする	12.5	12.5	11.5	
授業の準備をする	20.9	21.5	18.9	
第3因子（友人との交流）				
友人とおしゃべりをする	92.0	92.8	87.9	*
教室で友人と遊ぶ	78.1	74.2	68.1	*
仲の良いグループで行動している	85.5	83.0	83.6	

注：数値は「よくする」+「ときどきする」の割合（%）

⑤「休み時間の印象」との関連

表12では、休み時間の印象について比較した。学校に行く意欲が高い者ほど、休み時間を楽しみにしている。反対に、学校に行く意欲の低い者は、休み時間にひとりぼっちになる傾向が高く、いっしょにいる人をさがすことや、何をするかに迷っている。つまり、休み時間を楽しく過ごすことができず、手持ちぶさたで孤立しがちになることがわかる。

表12　休み時間の印象×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
休み時間は、楽しみだ	88.3	85.1	81.1	*
休み時間に、やりたいことがたくさんある	49.8	43.0	45.7	
休み時間は、何もせずのんびりしたい	29.3	42.4	48.2	**
休み時間に、何をするか自分で決めるのはめんどうだ	13.5	21.1	29.3	**
休み時間に、いっしょにいる人をさがすのがめんどうだ	7.1	17.4	21.1	**
休み時間に、ひとりぼっちになってしまう	2.9	12.5	13.9	**

注：数値は「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の割合（%）

⑥「自分が生き生きしている時」との関連

表13では、自分が生き生きしているときについて比較した。学校に行く意欲が高い者ほど、フォーマルな場、インフォーマルな場を問わず生き生きしている傾向が高い。

表１３「自分が生き生きしているとき」×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
第１因子(インフォーマルな場における生きがい)				
何人かの友だちと話している時	75.5	69.8	66.5	
昼休み	80.3	70.4	70.1	**
友だちと１対１で話している時	54.4	57.5	52.5	
昼食を食べている時	52.4	43.9	42.3	*
第２因子(フォーマルな場における生きがい)				
体育の実技をしている時	62.6	51.1	50.9	**
技術家庭の実習をしている時	41.0	32.2	37.0	*
部活動・クラブ活動をしている時	73.5	62.0	48.6	**
班で話し合っている時	42.9	28.2	27.4	**

注：数値は「とてもそう思う」+「まあまあそう思う」の割合（%）

⑦「クラブ活動・部活動の参加状況」との関連

表14では、クラブ活動・部活動の参加状況をみた。学校に行く意欲が低い者ほど、課外活動には消極的であることがわかる。表15では、性格傾向との関連を見た。学校に行く意欲が低い者ほど、消極的で非活発、一人で行動することを好むようである。しかし、友人の中でのリーダーシップという点では、三者間にほとんど差がなかった点は興味を引く。

表１４　クラブ活動・部活動の参加状況×学校に行く意欲

	高	中	低
積極的に参加している	83.0	68.2	55.1
積極的でないが参加している	15.4	27.1	31.9
参加していない	1.6	4.7	12.9

表１５　性格傾向×学校に行く意欲

	高	中	低	有意差
自分から進んで友だちの中に入っていくタイプ	66.9	53.8	51.4	**
いつもだれかといっしょでないと寂しいタイプ	44.2	58.1	52.1	**
活動的なタイプ	52.9	49.5	43.3	
友人の中で、あとからついていくタイプ	27.1	36.3	36.2	*
ジョークがうまいタイプ	31.9	32.7	35.5	
１人で行動するのが好きなタイプ	21.3	24.3	32.7	**
友人の中で、自分がリードするタイプ	23.2	22.3	23.1	

注：数値は「とてもそう」+「わりとそう」の割合（%）

⑧「成績」との関連

表16は、成績との関連である。学校に行く意欲=高のグループと学校に行く意欲=中のグループ間には顕著な差は見られなかった。学校に行く意欲の低いグループでは、自分の成績を「悪い」と評価している者が多くなっている。

表１６　成績×学校に行く意欲

	高	中	低
よい方	8.1	7.5	4.7
どちらかというとよい方	32.7	34.0	24.5
どちらかというと悪い方	39.8	39.2	34.3
悪い方	19.4	19.3	36.5

（有意差　p<.01）

⑨「家族環境尺度」との関連

表17では、家族環境尺度との関連をみた。学校に行く意欲が低い子どもの家庭ほど凝集性と表出性が低く、葛藤性が高い。独立性と達成指向性の間には明確な傾向は見られなかった。

表１７　家族環境尺度×学校に行く意欲

	高	中	低
凝集性	4.91	4.54	4.06
表出性	5.61	5.36	5.20
葛藤性	3.49	3.84	4.21
独立性	4.65	4.64	4.77
達成指向性	3.73	3.78	3.52